

参考資料

『古事記』中つ巻 崇神天皇(第10代)【出典:倉野憲司校注『古事記』(岩波文庫)2007, pp. 112-113.】

◆ 王(天皇)、祭司(神主)、神(大物主大神)、民衆の四者の関係はどう描かれているか?

この天皇の御世に、疫病多に起きて、人民死にて尽きむとしき。
 ここに天皇愁ひ歎きたまひて神牀に坐しし夜、大物主大神、御夢に顕はれて曰りたまひしく、「こは我が御心ぞ。故、意富多多泥古をもちて、我が御前を祭らしめたまはば、神の氣起こらず、国安らかに平らぎなむ。」とのりたまひき。
 ここをもちて駅使を西方に班ちて、意富多多泥古と謂ふ人を求めたまひし時、河内の美努村にその人を見得て貢進りき。
 ここに天皇、「汝は誰が子ぞ。」と問ひたまへば、答へて曰ししく、「僕は大物主大神、陶津耳命の女、活玉依毘賣を娶して生める子、名は櫛御方命の子、飯肩巢見命の子、建甕槌命の子、僕意富多多泥古ぞ。」白しき。
 ここに天皇大く歓びて詔りたまひしく、「天の下平らぎ、人民榮えなむ。」とのりたまひて、すなはち意富多多泥古命をもちて神主として、御諸山に意富美和の大神の前を拝き祭りたまひき。
 また伊迦賀色許男命に仰せて、天の八十平甕を作り、天神地祇の社を定め奉りたまひき。
 また宇陀の墨坂神に赤色の盾矛を祭り、また大坂神に墨色の盾矛を祭り、また坂の御尾の神また河の瀬の神に、悉に遣し忘ること無く幣帛を奉りたまひき。
 これによりて役の氣悉に息みて、國家安らかに平らぎき。

注

- 1) 「疫病」 流行病。
- 2) 「神牀」 夢に神意をえるために忌み清めた床。
- 3) 「大物主大神」 桜井市三輪山に鎮座する神。後出の「意富美和の大神」も同じ。
- 4) 「神の氣」 神のたたり。
- 5) 「河内」 大阪府八尾市近辺。
- 6) 「御諸山」 奈良県磯城郡三輪山。
- 7) 「八十平甕」 多くの平たい皿。
- 8) 「宇陀」 奈良県宇陀市。
- 9) 「大坂」 奈良県香芝市逢坂。



東アジアの古代の年代記にはしばしば夢を見る王の物語が現れる。

典型的にはマレー語のスジャラ・ムラユでのイスラームの伝来に関する記述。

闇婆への仏教の伝来。高僧伝。

漢への仏教の伝来。高僧伝。

おほものぬしの
大物主。崇神天皇。古事記。

これらの物語は、王権と宗教の緊張関係を伝えている。

王権は、（しばしば新来だが常にではない）宗教に警戒心をいだきつつ、自らの統制におこうとしている。それは、王が祭祀をつかさどる政教未分化の段階から政教分離の段階への移行と、前者による後者の統制を語っている。

この観点から見れば、古事記の崇神天皇の物語は、シャーマンとしての天皇がシャーマンとしての機能を封印し、聖職者に宗教機能を移譲する物語として読むことができる。